

湯川・朝永の「体験」

青木 健一

私は、湯川・朝永に直接対面し、その肉声を聞くことのできた最後の世代である。それもほんの少しの偶然のおかげで、それぞれ一度限りの経験ができただけである。それだけに、逆にも、どういう「存在」だったのか、に興味がつきない。

1977年、私の大学4年の冬、朝永が京都大学理学部の集中講義に来た機会を利用した特別講演会があった。私は開始時刻のずっと前に会場である理学部の共同大講義室（1号館5階のLと呼ばれた教室）に行った。すると既に座席は半分くらい埋まっている。そこに田中正さんがやってきて部屋を覗かれ、これは入らないかな、と言われるので、私は、絶対無理です、大きな部屋に変えて下さい、と頼んだ。田中正さんは本部キャンパスの法経8番あたりの教室をとり、すぐにその変更連絡が来た。学生はいっせいに飛び出して法経8番に走った。そこも次々と来る学生で、またたくまに満席状態になった。ややあつて様子を見に来た田中正さんはうなづいておられたが、結局、法経1番教室に再変更された。法経1番教室をかつて満員にしたのは、アインシュタイン訪日講演と湯川の帰国講演だったと聞く巨大な半円形の教室である。座席はほぼ満席、後部にも人が立ち並び、朝永も満席講演者となった。

朝永は落ち着いた静かな口調でこやかに話した。「糟粕」をなめる物理といいながら黑板にその漢字を書かれた。また、量子力学の波動関数の正体を湯川と議論したことや、有名な湯川のマルと朝永のレンズ型を黑板に描いた。満員の聴衆が静寂に聞き入る中、洒落で爆笑もとる名講演だった。

大学院に入ってM1の頃、「混沌会」で話すから一緒に行こうと小林誠さんに誘われ、青山秀明さんらと基研のコロキウム室に行った。日置善郎さんから、昔、混沌会で牟田泰三さんが話したときには、湯川が怒りだし、そのサインを牟田さんが見落とししたので、湯川は更に激怒した、ということをよく聞かされていたので、びくびくして（楽しみに）出かけていった。おそらくコロキウム室に入ったのも初めてだった。湯川の席は決まっているらしく、黑板に向かって右側の前だった。湯川が着席し、ふた付きの湯飲みでお茶が出されると、小林さんの話が黑板で始まった。

小林さんの話は当時の旬の話題、インスタントであった。湯川は黙って最後まで聞いていたが、話が終わると、次のように感想を述べた。「今日の話くらいようわからん話はなかった。」小林さんは有限の「時間」だけ存在するという説明をしていたので、更に、「インスタントというのは、素領域みたいなものですか？」と問うた。小林さんがどう答えたのかは覚えていないが、話にだけ聞いたことのある「素領域」が出てきたので素直に感動した。混沌会というのは毎月あるのだと聞かされて、また参加しようと楽しみにしていたのだが、その後、湯川の体調が思わしくないためか開かれなかったと思うので、おそらく最後の混沌会で最後の言葉を聞いたのではないかと思う。

本研究会の運営とプロシーディングス作成に関わるのと同時期に、2007年冬、久保治輔さん、末松大二郎さんらと湯川秀樹・朝永振一郎生誕100年記念展（巡回）を金沢大学と金沢21世紀美術館で行い、二人の実像を多くの側面から学ぶことができた、いや、学ばされた。そして、本研究会を通じて、おそらく他に2度とチャンスは無かったであろう、湯川・朝永らと直接に共同・対峙されていた方たちの肉声を聞くこともできた。

その中で、学生時代に面と向かっての肉声を聞いたことは大いなる幸いであった、と思うにいたった。直接垣間見たその厳かな晩年の姿と、そこに至る人生の軌跡の像は、私自身の課題や、毎日泣かされている大学院生教育の困難に何か光を与えてくれたような気がした。しかし、どこが明るくなっているのかをちゃんとわかるのには同じだけの時間がかかるのかも知れない。